

# 山と博物館

第42巻 第6号 1997年6月25日

大町山岳博物館



一輪の花 (キヌガサソウ)

撮影 峯村 隆

## 遭難慰霊に思う

峯村 隆

黒部川下廊下をしばしば歩くことがある。黒四ダムによって水量こそ制御されているとはいえ、その深いV字谷は未だ原初の姿をとどめて威圧的であり、スリリングな旧日電歩道の谷筋は特に、残雪や落石、土砂崩落のために二年と同じ状況にはない。

ある秋の雨上がり、私は新越沢出合から内蔵助谷出合に向かっていた。荷は重く、絶壁に穿たれた道も滑りやすく、落石の不安がつきまとうガラ場と尾根の小ささみな登り下りに疲れていた。

ふっと脇に目をやると、そこには仏壇然として石が積み、菊の花やタバコが供えられていた。それは「生き生き」というよりは「生々」しく、ここ二三日のものとも容易に判断できた。しかもそれらは、万一時、二人くらは雨をしのげる屋根状の岩の下、つまり絶好のビバーク地点であったのである。

どこかに死の危険がつきまとう登山という行為。その途中で出合う慰霊の諸物に元気づけられる者は皆無に近いだろう。黒部ではなおさらである。

私はいち早く通過しないではいられなかったが、その光景は脳裏に焼き付いて離れない。

ご遺族、関係者の心中は察するにあまりあるところだが、生前こよなく山や谷を愛された方の、もし霊というものが存在するならば、それは遭難現場を去り、より高くより深く最愛の地に向かったか、愛するご遺族を見守っているのだと信じたい。

黒部のあの岩屋は、いつまで死をにおわせ、いつまで生身の登山者のビバークを拒むことだろう。

山に咲く一輪の花、一本の木、あの峰この岩……。そこに一片の人を感じてもらえたら、私なら十二分に本望である。

(山岳博物館学芸員)

# 大町高校全校登山誕生のころ

丸山 彰

全校登山が生まれるまで

鹿島槍ヶ岳を主峰とする後立山連峰が、私達大町高校の庭から、校舎の窓から遮るものもなく壮麗に堂々と眺められる。その姿は形容できない程美しく立派だ。生徒達は毎日見慣れているせいも、殆ど関心は示さなかつたが、ある時、山岳写真家の塚本閣治さんを招いて山岳映画会を催した。学校から見える山やまが映し出された時、思わず生徒から万雷の拍手が湧き起こった。彼らの心の中に山や



第1回全校登山出発前  
(校庭にて、イス上は筆者 昭和23年6月3日)

まが誇りとして生きていることが解った。学校には、日本山岳会々員で積雪期の単独行をしては、いつも会誌に発表する著名な登山家小池文雄先生が、物理の教師として勤めていた。私は時折理科教室を訪ねては、山のことを教わっていた。

昭和十九年五月十二日、小池先生の提案で生徒を連れて、鹿島槍登山をすることになった。生徒から五十名の希望者があり、先生側から中村教頭をはじめ寺島、小林、大貫、安田の各先生と、小池リーダーと私、用務員の西沢さんが申し出て来た。

五月と言えば山はまだ冬の装いである。積



校門から徒歩にて出発

雪も多く、気温も夜など相当冷えることが予想されたが、皆意気軒昂であった。私は山に経験がある三人の生徒を連れて先発隊として本隊より早く出発した。大冷沢の出合で架橋作業で手間どつているところへ本隊が到着。ここで小池先生が今晚の炊事に必要な大鍋を忘れてきたことに気付く、先発隊の三名に鹿島集落まで借りに行ってもらうことになり、

先の西股小屋へ十時までに着くように指示され、間に合わなければ西股で泊まり、翌朝出発するようにという約束だった。鍋は到着したが、約束の十時を十分過ぎていた。谷を本隊が一行で登る姿を見て、三人は是非後を追って登りたいと懇願した。願いを聞き入れ、早速後を追うことになり、鍋などはそのままに出発した。本隊との差はなかなか詰まらなかつた。本隊の歩いた踏み跡を辿るのだが、夜の帳があたりを覆い始めた。踏み跡も凍りはじめ、探つて歩くのが次第に困難になつ

た。幸いA君持参のカンテラに助けられる。カンテラが歩く、他の三人は斜面へへばりつく。次にカンテラで足許を照らしてもらいながら一人ずつ動くので時間は四倍かかる。後線が近くなると、いよいよ斜度はきつくと、雪庇が立ちはだかる。闇があたりを包み、深い谷へ落ちていく。振り返ると、はるか下に大町の灯がまたたいしている。

ピッケルで雪庇を切る。雪片が闇の谷へ落ちてゆく。僅かの油断も許されない。緊張の時間が続き、漸く稜線へ出た。後続を案じて本隊から数人が稜線まで出迎えてくれる。数人が「わっ」と喚声をあげて抱きついてくる。危険をのりこえた喜びが湧きあがる。

漸く安全な道を降る。冷池小屋へ着く。時刻は午後十二時を過ぎていた。シラビソの枝を切つて焚いているので煙で眼を明けてもらえない。まんじりとしないうち夜が明けて、朝食もそこそこに頂上へ向かう。広い雪庇の上を歩けるので楽だ。登頂をすませ、いよいよ下山だ。雪庇を切つてザイルをおろし、小池先生と私が、一人ずつザイルにつかまらせておろしてゆく。好天のため下方の小さい沢から雪崩が時々落ちる。小池先生は後を私に任せ下へ降りてゆく。最後は先生方で最後尾は西沢さんだ。ザイルを巻いて西沢さんと一緒に下る。小さい雪崩が次々と出る。逃げるように下で待つ本隊に追いつく。西股へ出ると道は平坦で楽だ。大町に着く、冒険の鹿島槍登山は終わった。翌年小池先生は他校へ転任した。私の二十七歳の春であった。

## 全校登山

私はかねがね、札幌一中の雪合戦と、甲府中学の二十四時間歩き続ける強歩が憧れの行事だった。わが校でこれに匹敵する行事とい



稜線近し

学校から見える山のどこかに登らせてやりたかった。それに加えて各山頂の気温、風速、風向、溪流の水温、地温等々の科学的調査を実施すれば、興味ある結果が出るだろうと考え、当時の生物教師だった羽田健三先生に相談したところ、先生は即座に賛成し協力してくれることになった。調査は物象部、生物部などが担当すればよい等、夢は広がっていった。計画の大綱を職員会で承認をうけ、実施へと準備を進めた。目的地は、白馬岳、鹿島槍ヶ岳、蓮華岳、烏帽子岳、燕岳とし、身体の弱い者のために黒沢と湯俣水俣、八方のキャンプ班を作った。戦争の傷跡が残るこの時



長ザク尾根を登る

えば登山だと考えていた。一年に一度、山へ連れてゆき、大自然の空気を吸わせてやりたかった。

前記の鹿島槍登山で、生徒の山に対する対応の仕方と体力とは、尋常のものでないことが解った。

学校の計画は、世間の反響を呼び、各新聞社が取材に訪れた。

実施の日は、昭和二十三年六月三日ときめた。

参加者は次のようになった。

- |       |      |      |      |
|-------|------|------|------|
| 白馬岳   | 三六名  | 八方   | 四一名  |
| 鹿島槍ヶ岳 | 四八名  | 蓮華岳  | 六九名  |
| 烏帽子岳  | 二四名  | 燕岳   | 一一五名 |
| 黒沢    | 五五名  | 湯俣水俣 | 三四名  |
| 合計    | 四二二名 |      |      |

積雪の残る登山だけに装備が心配だったが、さすが古い山の町だけに、金剛杖、金カンジ



鹿島槍ヶ岳頂上のエール (昭和23年6月4日)

キなど各家で殆ど用意ができた。なかにはビッケルの銘刀までが用意され驚かされた。

服装は通常登校の服と帽子が大 half で、履物は、軍隊払下げの軍隊靴、地下足袋があり、草鞋もあった。脚の保護には巻脚絆、ゲートルが使われた。雨具は、油紙や着ゴザがあり、多様な服装と用具だった。

いよいよ実施の日が来た。決行の日ともいえた。鹿島槍隊と蓮華岳隊、烏帽子岳隊だけは集合は学校であった。全員を校庭に集め、激励と注意事項を伝えた。他の隊は最寄りの駅等で同じような集いとなった。

私は鹿島槍隊を率いることになった。校庭で注意事項を話す間、みんな真剣に聞いてくれる。いよいよ出発となった。遥かに西の空に聳える鹿島槍頂上に続く尾根まで、バスがないので自分の

脚で登るのである。二ツ屋、鹿島の集落を経て、山ふところに入った。大谷原、西股を越えて長ザク尾根を登る。急坂である。雪も相当多くなった。今日の終着が眼の前にある。漸く最後の登りを終り、稜線に出た。剣・立山の雄峰が眼の前に聳えている。思わず感嘆の溜め息が出る。連れて来てよかったと、感慨が深い。

ここからは安全に下って冷池小屋に着く。持ってきた炊事用具で米、味噌の主食を作り、副食は夫々が持参の物をあてる。待望の夕食である。陽はまだあたりを照らし、夜まで

暫く時間があ  
る。バテる者、  
弱音を吐く者な  
ど一人もなくよ  
く早く着いたも  
のだ。驚くべき  
少年たちである。  
小屋の中や外で  
和気あいあいの  
食事である。空  
は晴れて明日の  
好天を約束して  
いるようだ。持  
参の毛布などを  
利用して寝につ  
く。他の山の様子  
が少々気になる。

翌日は小屋から頂上を往復する。稜線は厚  
い雪庇が続いて歩き易い。時間に余裕がある  
ので、雪上散歩を楽しむ。物象班が地温の測  
定に余念がない。実は昨日の登りの際、高千  
穂平を過ぎて稜線へトラバースの箇所で生徒  
が一人滑落した。しまったと思った瞬間、シ  
ュルンドで止まった。好運だった。二度と過  
ちのないよう、生徒から細引を集めて、これ  
をなつてザイル代りにした。戦後でザイルは  
まだ間に合わなかった。

帰りは、登頂成功の喜びもあって足取りは  
軽い。長ザク尾根を無事過ぎて、平坦な道へ  
入ると尚早い。瞬く間に鹿島集落を過ぎる。  
学校へは間もなく着く。終わりの挨拶を交わ  
し、それぞれが家路に着いた。

大事業は終わった。他の隊はどうかと少々  
心配になるが、満足感も隠せない。遥かに遠  
い道にも、弱音を吐く者は一人もなかった。  
元気な生徒に敬意を表し、一人ひとりを労



布引岳の稜線を行く

つてあげたい気持ちも湧いてくる。

終って各新聞社は戦後の社挙だと評価し、  
紙面を飾ってくれた。

斯界の大御所、横有恒先生は、生徒会新聞  
に次のような言葉を述べてくださった。

「よい意味の伝統が、戦後あらゆる方面に  
荒廃してしまった。これは登山においても言  
えるがこういう時に大町南高校の全校登山は  
よき伝統を保つ意味で大変結構な計画だった  
と考える。よい伝統はこうした真面目な気持  
ちで自然を求めてゆくのである。今度の成功  
を心から喜んでいる。」

また大町の登山家百瀬慎太郎氏は

「今度の計画は、天興に恵まれた位置にあ  
る特殊な学校であつてこそ、非常な成功を収  
め得たのであると思う。僅か十七名の不参加  
で全員に登り得たということは感嘆に値する  
ことで、私は今後も是非毎年実行して貰いた  
いと考えている。」

また丸山尚一氏（鹿島槍班へ同行、日本山

岳会員・信陽新聞社）は

「大町南高の山を教室とした集団登山が、  
日本の新しい登山のゆきかたを示してくれた  
ことは事実だ。私は鹿島槍登はんの一行に加  
えさせて貰ったが、長ザク尾根の登りに一人  
の弱音を吐く者もなく、二八八九米の山頂に

若きエールを聞いたときは、うれしかった。  
今度の登山が全国の高校に与えた影響は大き  
いが、それ以上に日本山岳界への影響は大き  
い。」

と各方面から賛辞の声が寄せられた。  
（日本山岳会々員・大町山岳博物館顧問）



燕岳頂上のエール  
(昭和23年6月4日)



# 松本市と大町市のサクラソウ

千葉悟志

## 一、「危険種」サクラソウの現状

一九八九年に刊行された『我が国における保護上重要な植物種の現状』（通称・植物レッドデータブック）では、日本に生育する約五三〇〇種の維管束植物のうち、今や六分の一（八九五種）が「絶滅」「絶滅危惧」「危険」「現状不明」に区分されている。

同書で重点調査種七種のうちのひとつとされているサクラソウは、かつて北海道南部から鹿児島県までの湿った草原や川岸、春に陽光が射す林床に生育していたが、現在は二四



写真1 春の日溜りに咲くサクラソウ

都県一〇一の生育地のうち一八の生育地で絶滅、一二の生育地で絶滅寸前とされている。長野県では、これまでに一七市町村で生育が報告され（長野県植物誌編纂委員会・一九九五）、松本市や大町市では、湿性林下や湿地で見ることができ。しかし、それは手厚い保護を受けている場所を除けば松本市では「ちら ちら」、大町市では「ちょこん」といったところで、このままではいずれ消えてしまうのかもしれない。

## 二、春が来たら

木立を透ける木漏れ日が、冷えきっていた大地を包み春を告げるころ、サクラソウはひょっこり地上に現れる。

七、八枚の葉は斜状に展開され、その中心からは、一本の花茎が上空に向かって伸びはじめる。あちらこちらで花芽がほころび、つぎからつぎへとピンクの花が艶やかに咲き誇る（写真1）。

天気の良い日には、蜜を求めてハナバチやハナアブの仲間が忙しく訪れる。

やがて、それぞれの花には二ミリの程度の種子が四、五〇個ほどつくられ、押し寄せる夏の気配とともに散布される。

初夏、サクラソウは繁茂してきた植物に覆い隠され、いつしか地上からその姿を消す。来春まで地下茎で過ごすことになる。



写真2 蜜を求めて訪れたピロウドツリアブ

## 三、その巧妙かつ密かなる戦略

サクラソウが種子をつくるためにはまず昆虫たちに蜜を提供して、花粉を運んでもらわなければならない。しかし、蜜は花筒の底近くにあり、短い口（口吻）の昆虫は蜜を吸うことができない。したがって、ハナバチ類やハナアブ類、チョウ類といったストローのように長い口吻を持つ昆虫は種子をつくる上で欠かせない存在となる（写真2）。

この昆虫たちに効率よく花粉を運んでもらうためにサクラソウは異型花柱性という特徴を持っている。

サクラソウの異型花柱性は、大きく分けると約（花粉がつくられているところ）の位置が柱頭よりも低い長花柱花と葯の位置が柱頭よりも高い短花柱花の二つのタイプに分けることができる（図1）。

例えば、蜜を吸いに来たピロウドツリアブ

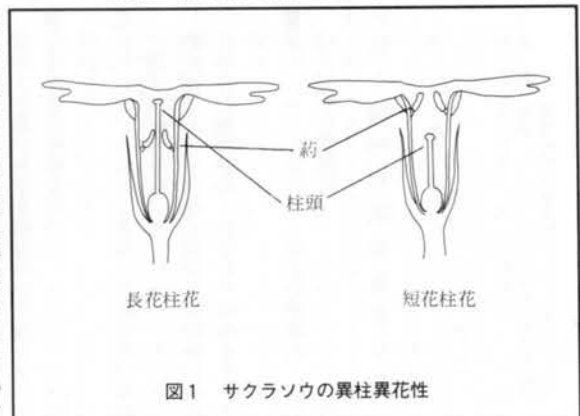


図1 サクラソウの異柱異花性

が短花柱花に口吻を差し込んだとしよう。花にとまって蜜のありかを探しているうちに口吻の根元周辺に（顔にちかいほう）花粉がつく。

次にそのピロウドツリアブが長花柱花を訪れて口吻を差し込むと、附着していた花粉はちょうど長花柱花の柱頭あたりにくる。ピロウドツリアブが蜜のありかを探しはじめると口吻は柱頭に触れ、花粉が渡される。

逆に、長花柱花を訪れた際には、花粉が口吻の先端のほうにつくから、短花柱花の柱頭へ効率よく花粉が運ばれ、種子がつくられることになる。

また、サクラソウには自家不和合性といって、長花柱花と短花柱花の間でよく種子がつかられ、自らの花粉や同じ花のタイプの間（長花柱花と長花柱花、短花柱花と短花柱花）では、実を結ばないようにしている。

表1 ニホントリバによる食害率と結実率  
(1995.6)

	食害率(%)	結実率(%)
伐採された生育地	66.7	19.0
林床にある生育地	74.8	16.0

※ 結実率は小花茎数を100とし、そこから食害されたものと種子がつくられていなかったものを差し引いて示した。

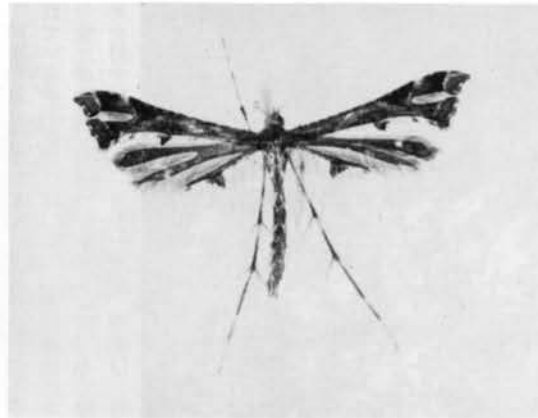


写真3 ニホントリバの成虫

実に、適応的で、他種の効果を促進する機能ではあるが、実際には、葯や柱頭の位置はさまざまであり、なによりも昆虫がいてはじめてこれらの機能が発揮されるのである。言い換えれば、花粉を運んでくれる昆虫がいない生育地では、それはいずれ「消滅」を

意味することになる。そのため、サクラソウにとつて昆虫は必要不可欠ということになる。四、せっかくできた種子なのに

ようやく受粉し、「さあ、これから」というときに、松本市と大町市ではニホントリバというガの幼虫が発生する(写真3)。幼虫はサクラソウの子房や種子になりかけている部分を好んで食べる。サクラソウから見ればまさに害虫である。このうち、松本市ではかなりの割合で幼虫に食害されている(表1)。

これが原因につながるのかわからないが、種子による繁殖を確認することはなかなか難しい。もちろん、群落内で定着する実生もあれば、雨水や小川に流されて新たな場所而定着する実生もあるだろう。土の中に埋もれて発芽する好機をうかがっている種子の中にはあるにちがいない。

いずれにせよ、種子は新天地を求めめるため、群落を維持するための大事な役割を担っていることは確かである。

五、サクラソウはかつて身近な植物のひとつであったという

—松本市のサクラソウの場合—

長野県のほぼ中央に位置する松本市の中山地区で、かつて、湿性林下にサクラソウの大群落があったというが、近年、有用樹種の植林を目的として、サクラソウの生育地や周辺での大規模な皆伐がおこなわれた。

その結果、湿性土壌は一変して乾燥し、伐採のために搬入した重機は、辺りを踏み固め、生育していたサクラソウ群落は大打撃を受け

た。春になると辺り一面がサクラソウに覆われていたという林床も、現在では二五×一〇mの範囲内の群落を除いては点在するのみとなつてしまった。

ここでは、保全のための調査・研究がおこなわれているが、いまは現存の群落を維持することすら難しい状況となつてきている。

—大町市のサクラソウの場合—

北アルプスを正面に見据えることができる大町市の東山地籍にも、一昔前、サクラソウの大群落があったという。

比較的、人里に近く、定期的の下草刈りや手入れがおこなわれていたのであるが、いまは放置されたままである。そのため、サクラソウ群落は、いつしか背丈の高いササやスキの群落へと移り変わり、その中でポツリポツリと生育するのみとなつてしまった。

今年、花を着けた個体はすべて長花柱花で、わずかに五個体。結実は見られない。

しかし、よく見ると花を着けていない個体もある程度観察することができる。

したがって、この地には群落を回復させる可能性が残されている。かつてのような大群落とはいかないまでも、試みをするだけの価値があるのではないかと私は思う。

江戸時代より数多くの園芸品種が生み出され、人々に親しまれてきたサクラソウ。しかし、いつしか野生種の生育地は各地で失われ、その存亡が危ぶまれている。

ここでは、サクラソウについて述べたが、このような状況下に置かれている種は他にもサクラソウだけではない。保全の急務を要す

る自然は全国各地に多くある。しかし、希少種や絶滅危惧種だけを守ればよいというわけでもない。その種を維持するためには、その土地にあった植生の保全、復元が必要であり、さらにはそれらに関わる昆虫や動物、植物をも維持していかなければならない。そのため、詳細な分析や情報収集をおこない、それに基づく管理が必要となる。また、その後のモニタリングは欠かすことができない。保全や復元には長い年月や多大な労力を必要とすることが多いが、なによりも人々の関心が常に自然へと向けられていることが大切なのではないだろうか。

(大町山岳博物館学芸員)

#### 六、主要参考文献

土田勝義・千葉悟志(一九九五) 松本市中山におけるサクラソウの保全生物学的研究、信州大学環境科学年報18:23-31 P  
長野県植物誌編纂委員会(一九九五) 長野県植物誌チェックリスト

我が国における保護上重要な植物種及び群落に関する研究委員会種分科会(一九八九) 我が国における保護上重要な植物種の現状、日本自然保護協会・世界自然保護基金日本委員会  
鷲谷いづみ(一九九五) 植物の世界61:30-32 P 朝日新聞社。

#### 山と博物館第42巻第6号

発行 一九九七年六月二十五日発行  
〒388長野県大町市大字大町八〇五六一  
大町山岳博物館  
TEL:026-121-2102  
印刷 大糸タイムス印刷部  
定価 年額一、五〇〇円(送料共)(切手不可)  
郵便振替口座番号00500713353